

身の回りの漢字

学習日 月 日 () ()



確認しておこう

わたしたちの身の回りには、長い間に決まった言い回しで使われるようになった表現がたくさんあります。ここでは、漢字三字の言葉を集めました。線の横に読み仮名を書きましょう。また、線の言葉の意味や使い方を国語辞典で調べ、短文を作りましょう。

① 間一髪

② 最高潮

③ 小細工

④ 金輪際

⑤ 正念場

⑥ 高飛車

⑦ 泥仕合

⑧ 理不尽

鳥取の文学散歩

鳥取県が舞台になった文芸作品を紹介します。

「暗夜行路」

志賀直哉 (一八八三〜一九七二)

志賀直哉は「白樺派」と呼ばれる小説家の人です。自然主義に対抗して、人間の内部にある生命の力を信じる理想主義・人道主義の立場を取りました。

「暗夜行路」は志賀直哉の唯一の長編小説です。父との不和を主題とした小説「時任謙作」が「暗夜行路」に引き継がれて、主人公の名前となりました。時の流れに身を任せ、与えられた運命に謙虚に従っていこうとする主人公の自我形成に主題を移して、「暗夜行路」として再生したのです。様々な苦しみの果てに大山に登った主人公が、大自然の中で全てを許せる心境に達します。

典拠 新国語便覧(第一学習社)

☆読み仮名を書きましょう。

() () () () () ()

唯一 謙虚 自我形成

大山の他にも知っている地名が出てくるかも知れませんよ。





確認しておこう

「まるで〜のようだ」「〜みたいだ」という感じから、ある物事の性質や様子を、それと似たものや、似たところのあるものを使って表現することを **比喩** といいます。

☆ 左の写真を見て感じたことを、比喩を使って表現してみましょう。



まるで、

のようならつきよう畑。

右の形で書きにくい場合は、この欄に自由に書きましょう。

☆ 左の写真を見て感じたことを、比喩を使って表現してみましょう。



みたいに羽ばたいている。

コハクチョウが、

☆ 次の慣用句は比喩からきたものです。どちらかを選んで文を作りましょう。

○ 借りてきた猫

○ 蚊かが鳴くよう

鳥取の文学散歩

香川 景樹 かげき 歌人（一七六八〜一八四三）

香川景樹は江戸期の歌人です。鳥取藩士荒井小三次の次男として生まれました。父を亡くして伯父である奥村定賢の養子となりました。二十六歳の時、妻を伴って京都に出て、苦学しました。一七九六年、歌の師匠であった香川景柄（かげもと）の養子となりました。一八〇四年、香川家を離縁されて独立しましたが、引き続き香川姓を名づけることは許されました。彼の率いる一派は「桂園派（かつらそのは）」と呼ばれ、晩年には門弟一千を数えるまでに成長しました。そして、明治時代に至るまで、歌壇に大きな影響を与え続けることになりました。

大堰川おほみがわかえらぬ水に影見えて

「こどもさける山桜かな『桂園一枝』」

大井川、その再び帰ることなく流れる水に影を映して、今年も咲いた山桜であるよ

参考 ウェブサイト「やまとうた」

☆読み仮名を書きましよう。

（ ） （ ） （ ） （ ） （ ）
 養子 師匠 門弟



確認しておこう

常用漢字表の「附表」には、特別な読み方をする語として百十語が示されています。中学校で学習した語が正しく読めるかどうか、確認しましょう。

☆ 次の漢字に読み仮名を書きましよう。

- 砂利 白髪 相撲 草履
- 早苗 時雨 竹刀 芝生
- 風邪 仮名 為替 心地
- 海原 乳母 笑顔 乙女
- 小豆 硫黄 意気地 田舎

- 太刀 足袋 梅雨 二十歳

- 凹凸 名残 雪崩 波止場

- 日和 土産 息子 紅葉

- 木綿 大和 行方 若人

叔父・伯父

叔父と伯父の違いを調べましよう。

叔母・叔母

叔母と伯母の違いを調べましよう。

鳥取の文学散歩

伊良子 清白 (一八七七〜一九四六)

伊良子清白は八上郡曳田村(現在の鳥取市河原町)に生まれ、雑誌「文庫」に作品を発表しながら河井醉名(かわいすいめい)、横瀬夜雨(よこせやう)などの詩人と交流し、「文庫の三羽鳥」と呼ばれました。

一九〇六年に出版された唯一の詩集「孔雀船」には、それまでに発表した膨大な作品の中から厳選された十八編の詩が収録されています。

幼い頃に故郷を離れ、三重、京都、島根、大分、台湾などを転々とした清白は、その代表作「漂白」にちなみ、「漂白の詩人」とも呼ばれています。

典拠 鳥取県立図書館ホームページ

☆ 右の文には、鳥の名前が漢字で二つ出てきました。その漢字を書き出ましよう。また、その漢字に読み仮名を書きましよう。

Blank boxes for writing the kanji and reading kana.

「三羽〇」というのは、専門を同じくする三人の優れた人、という意味で使う言葉です。



☆ 古文の表現に慣れ、その特徴をつかんで読み味わいましょう。

問題 次の二つ文章は、松尾芭蕉の「おくの細道」からの抜粋です。例

にならって歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、全文を平仮名で書きましょう。(例 草の戸も住み替はる代ぞ雛ひなの家↓くさのともすみかわるよぞひなのいえ)

月日は百代の過客くわかくにして行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて、老いをむかうる者は、日々旅にして旅を栖すみかとす。古人も多く旅に死せるあり。

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺ひつぎを納め、三尊の仏を安置す。七宝散り失せて、珠たまの扉風に破れ、金の柱霜雪こけうせつに朽ちて、既に頽廢たいはい空虚くうこの叢むらとなるべきを、四面新たに囲みて、薨いしらかを覆ひて風雨しゆを凌ぐ。しばらく千載の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや光堂

松尾芭蕉は、「おくのほそ道」の中でたくさんの俳句を詠んでいます。現在の句になるまで、何度も推敲を重ねたといわれている句があります。例えば、立石寺で詠んだ「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」は、「山寺や石にしみつく蟬の声」、「閑かさや岩にしみこむ蟬の声」などが伝えられています。みなさんも、俳句(十七音)に感動をまとめ、詠んでみてはいかがでしょうか。



松尾芭蕉は、「平泉」のところで、「さても義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢むらとなる。『国破れて山河あり、城春にして草青みたり。』と笠打ち敷きて、時のうつるまで涙を落としはべりぬ。：』と書いています。この「国破れて：』は、唐時代の詩人、杜甫の作品です。芭蕉は、人生の大半を旅に過ごしながらか詩歌の道を究めた古人に憧れていました。杜甫もその中の一人でした。

春望 (五言律詩)

杜甫

国破山河在
城春草木深
感時花濺淚
恨別鳥驚心
烽火連三月
家書抵萬金
白頭搔更短
渾欲不勝簪

次の漢詩の書き下し文を完成させましょう。

国破れて、山河在り
城春にして草木深し

烽火三月に連なり

白頭搔けば更に短く

鳥取の文学散歩

伊良子清白の「漂泊」の前半部分を読み、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直しましょう。

漂泊
へう ぱく

伊良子 清白

蕨戸に
むしろど

秋風吹いて

河添の旅籠屋さびし
かはぞひ はたごや

哀れなる旅の男は

夕暮の空を眺めて

いと低く歌ひはじめぬ

亡母は
なきはは

處女と成りて
をとめ

白き額月に現はれ
ぬかつき

亡父は
なきちち

童子と成りて
わらは

圓き肩銀河を渡る
まる かた

柳洩る
やなぎも

夜の河白く

河越えて煙の小野に

かすかなる笛の音ありて
ね

旅人の胸に触れたり



和歌(短歌)の主な表現技法を確認しておこう

① 和歌(短歌)の形式: 「五・七・五・七・七」の五句三十一音が基本です。

「五・七・五」を上句、「七・七」を下句といいます。

② 区切れ: 歌の中で意味が切れること。

五七調↓二句・四句切れによるもの。(万葉集に多い)

七五調↓初句・三句切れによるもの。(古今和歌集・新古今和歌集に多い)

③ 枕詞: ある語句を引き出すための前置きの言葉。

例えば ひさかたの↓光・天・雲 たらちねの↓母 など

裾にかかる枕詞

韓衣からころわ 裾すそに取りつき 泣く子らを 置きてや来ぬやき 母なしにして

防人の歌

四句切れ

④ 掛詞: 一つの語に二つの意味を持たせる表現技法

例えば あき「秋」と「飽き」

⑤ 体言止め: 歌の末尾を体言で止める表現技法。その語を強調するとともに、余韻を残すために用いる。

春の苑 くれなゐにほふ 桃花 下照る道に 出で立つ少女

体言(名詞)

鳥取の文学散歩

伊良子清白の「漂泊」の後半部分を読み、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直しましょう。

故郷の

谷間の歌は

つづ 續きつ、断えつつ哀し

おほぞら こだま をと 大空の返響の音と

地の底のうめきの聲と

交りて調は深し

旅人に

母はやどりぬ

若人に

父は降り

小野の笛煙の中に

かすかなる節は残り

(下の段へ)

旅人は

歌ひ續けぬ

みどりこ 嬰子の昔にかへり

ほほゑ 微笑みて歌ひつゝあり

「おくのほそ道」の冒頭に

「漂泊」という言葉がありました

たね。覚えていますか?

「…予もいづれの年よりか片雲

の風にさそはれて、漂泊の思ひ

やまず、海浜にさすらへ、去年

の秋…」と続きました。二人の

旅はどんな旅だったでしょう

か。おくのほそ道は続きを、伊

良子清白は他の詩歌を読んで

みては、いかがで

しょうか。



古典を読もう 4 学習日 月 日 ()

☆ 次の和歌(短歌)を読んで、下の問いに答えましょう。

万葉集 (A B) ・ 古今和歌集 (C D) ・ 新古今和歌集 (E F)



持統天皇

A 春過ぎて夏来るらし白^{しろたへ}栲の衣^ほ乾したり天の香具山

額田王

B 熟^{にきたつ}田津に船乗りせむと月待てば塩もかなひぬ今は漕^こぎいでな

紀貫之

C 人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香ににほいける

在原業平

D 起きもせず寝もせで夜を明かしては春のものとながめ暮らし

宮内卿

E 花さそふ比^{ひら}良の山風吹きにけりこぎ行く舟の跡みゆるまで

西行法師

F 心なき身にもあはれは知られけり嶋^{しぎ}立つ沢の秋の夕暮れ

☆三大和歌集の比較をして、和歌の特徴や技法を整理しておきましょう。

☆ A B E F は、それぞれ何句切れですか。

(A) (B)

(E) (F)

☆ A B C D F にある和歌の表現技法を、後ろから選び、書きましよう。

きましよう。

(A) (B)

(C) (D)

(F) ()

【表現技法】

枕詞 掛詞 体言止め 係り結び

歌枕 (和歌に詠まれ、親しまれている諸国の名所のこと)

上段の F の歌と共に、左の二首を合わせて三^{さん}夕^{せき}の歌と呼ばれています。いずれの歌も、秋の夕暮れのしみじみとした「あはれ」の情趣を詠んでいます。

藤原定家

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の^{とまや}苦屋の秋の夕暮れ

寂蓮法師

寂しさはその色としもなかりけり^{まさ}横立つ山の秋の夕暮れ

「論語」は、孔子やその弟子たちの言行を記録したものです。

書き下し文

子曰はく、「己の欲せざるところは、人に施すことなかれ。」と。

訓読文

子曰、「己所不欲、勿施於人。」

①く③の「訓読文」を「書き下し文」に、また「書き下し文」を「訓読文」にして、漢文に親しんでいきましょう。

① 子曰、「学而不思則罔。思而不学則殆。」

書き下し文にしましょう。

② 子曰はく、「学びて時にこれを習ふ、また説よきばしからずや。朋とも遠方より来たるあり、また樂たのしみしからずや。人知らずして慍うらみみず、また、君子ならずや。」と。

返り点や送り仮名をつけて、訓読文を完成させましょう。

子曰、「学而時習之、不亦説乎。有朋自遠方来、不亦樂乎。

人不知而不慍、不亦君子乎。」

③ 子曰はく、「故むかしきを温めて新しきを知れば、もつて師たるべし。」と。

返り点や送り仮名をつけて、訓読文を完成させましょう。

子曰、「温故而知新、可以為師矣。」